



高校生の発想はすばらしい！立命館宇治高校「探究」に学ぶ

立命館宇治高校主催 World Wide Learning 研究報告会に先日参加しました。そこで報告された立命館宇治高校の探究活動は大変興味深いものでした。注目したいのは「高校生の発想のすばらしさ」です。高校のカリキュラムに「総合的な探究の時間」に導入されて数年が経過しました。「探究とは何か」「どのような取り組みをすることが、高校生にとって意味があるのか」ここに紹介する立命館宇治高校の生徒の皆さんの取り組みは、その疑問に明快な答えを与えてくれます。GFSで探究に取り組む本校の皆さんにとっても参考になると考え、ここに紹介します。

★チーム名は「ポンズ」注目したのは「廃棄苗」

彼らの取り組みで面白いと思うのはチーム名。立命館宇治高校では必ず自分たちの探究チームに名前を付けます。ポンズの二人は1年前から「廃棄苗」の問題に関心を持っていました。「廃棄苗」とは育つのに捨てられてしまう苗のこと。彼女たちは京都・久世郡になる「山田育苗園」を訪問します。実は苗を育てるのはとても大変な作業です。山田育苗園では藁を一面に敷き詰め、それを足で踏み固めて苗床を作ります。しかし、大きすぎる、形が悪いという理由だけで苗は出荷できなくなり、結果、その苗は廃棄することになります。その数、年間およそ10万株！「これを有効利用できないの？」彼女たちの取り組みはこの事実を知ったことからスタートします。



★興味関心をかけ合わせる—SDGs 4 × SDGs 12

廃棄苗をもらった彼女たちが向かったのは同学園の立命館小学校。この苗が捨てられてしまう苗であること、丁寧に育てれば、食べられる野菜に育つこと、彼女たちは小学生に食育の授業を行いました。小学生の反応は上々。興味関心を持ってもらえました。女子高校生2人のチーム、ポンズ。一人はこの廃棄苗に、もう一人は「教育」に興味を持っていました。その二人の興味関心がぴったりとマッチしたのが、この「廃棄苗」を活用しての子どもたちへの「食育」でした。SDGsの二つの課題「4 質の高い教育をみんなに」と「12 つくる責任つかう責任」が、ここでごちゃごちゃと組み合わせられました。

★「もったい苗」の誕生！—ボランティアスピリッツだけでは社会は変えられない！

「ボランティアスピリッツだけでは限界がある」いろいろな取り組みを進める中で彼女たちはいくつかの壁を感じます。この「廃棄苗」を活用した新しいビジネスは生み出せないか。しかし、なかなかいい考えが浮かびません。その時、ハッと気が付いたのが「廃棄苗」という名称。これが良くないのではないか、いかにもネガティブな印象をもたらすこの言葉。そうだ！「もったい苗」だ。—この新しい呼び名が彼らにアイデアをもたらします。彼女たちはこの「もったい苗」に、土・プランター・食育冊子などを合わせて、より多くの人が栽培に取り組んでくれるよう工夫を始めます。彼女たちを支援してくれる企業や団体もいくつか生み出されています。

★ポンズの取り組みをふりかえってみましょう

ここにはいくつかの出会いとチャレンジがあります。まずは彼女たち二人の出会い、それぞれの興味関心の絡み合い。実は「もったい苗」の名称を発想したのはお笑い芸人「かみなり」の二人、この名づけが彼女たちの発想を大きく広げ、彼女たちの取り組みに価値を与えることとなります。なぜ、ここに「かみなり」の二人が絡むの？実は彼女たちは「CHANGE MAKER U-18」という大会にチャレンジをします。そこにこの出会いが待っていました。見事予選を潜り抜け、決勝戦に挑む。その大会で主張したのは次の2つ。一つは子どもたちの教育にターゲットを合わせ、食品ロスの削減をはじめとする食育の実施、苗農家には売上の一部を還元し、支援をすること、もう一つは「もったい苗の食育のテーマパーク」づくり。彼女たちは見事優勝しました。この大会にチャレンジしたからこそ、つながった関係、開かれた未来がそこにはありました。

若者の社会へのチャレンジが注目されています

立命館宇治高校の取り組みともかかわって、1月24日、中日新聞の朝刊・夕刊に掲載されていた記事を二つ紹介します。核兵器禁止条約の発効一年を記念し、核廃絶署名に取り組む高校生のお話です。長崎の高校生を中心に、十八都道府県の高校生が合唱で平和への思いを繋いでいます。その動画が You Tube で公開されています。発信の仕方が現代の高校生ならではのですね。ぜひ、皆さんも観てみてください。



核廃絶へ歌をバトンに

核兵器禁止条約の発効一年を記念し、核廃絶署名に取り組む長崎など十八都道府県の高校生が、合唱で平和への思いをつないだ約六分の動画を投稿サイト「ユーチューブ」で公開しているQRコードから、新型コロナウイルス禍で署名活動や高校生同士の交流が制限される中、若い世代を中心に多くの人へ条約の意義を発信する。

2つ目の記事は椋山女学園大学4年生の中村葵さんの記事です。大学での卒業研究を地域おこしと関連させて取り組んでいることが記事に取り上げられています。実は、彼女は本校の卒業生、皆さんの先輩です。卒業生がどのように社会と関わりながら自らの研究を進めていること、尚且つ、地域社会の皆さんがそれに呼応して支援をしてくれていること、新聞記事に取り上げられ、社会が後押しをしてくれることを心強く思います。若者のチャレンジをしっかりと受け止められる包容力を持った社会でありたいと思います。

条約発効1年 高校生が動画配信

動画の冒頭で「皆さんと一緒に条約を育てていきたい」とのメッセージと共に、核兵器を全面的に禁止する条約の内容を紹介。日本語と英語の字幕のほか、手話も付け「一カ国でも多くの批准を求めます」と訴えた。続けて原爆をテーマにした曲「青い空は」を、長崎市の爆心地公園や広島市の原爆ドーム前をはじめ、各地でそれぞれが合唱する動画をつなぎ、リレーソングに仕立てた。

核兵器禁止条約の発効一年を記念し、核廃絶署名に取り組む長崎など十八都道府県の高校生が、合唱で平和への思いをつないだ約六分の動画を投稿サイト「ユーチューブ」で公開しているQRコードから、新型コロナウイルス禍で署名活動や高校生同士の交流が制限される中、若い世代を中心に多くの人へ条約の意義を発信する。

今月の言葉



「早く行きたかったら一人で行け。」

「遠くまで行きたかったらみんなで行け。」

立命館宇治高等学校 World Wide Learning 研究報告会で講演を行った藤原さと氏の言葉です。

「疑問に思うことはひとりひとり違う。そうするとチームになることに意味はあるのかと思います。協働することはそうそう簡単なことではない。でも、きっと、チームになること、協働することは大事なことなんだろう、私はそう思います。」

上記の言葉は、その時に合わせて言われた言葉です。心に留めておきたい言葉だと思いました。「みんなで行く」、人間であればその知恵を使いたいものです。



まちおかしでまちおこし

南知多出身・椋山女学園大生

地元果物で名所モチーフに



「南知多の宝箱」を考案した中村さん。南知多内海の「アルザス」で

椋山女学園大四年の中村葵さん(ニ)南知多町山海が、地元南知多産の果物を使ったり、名所をモチーフにしたたり菓子をセレクト。「南知多の宝箱」を考案した。同町内海の菓子店「アルザス」と協力して開発し、人気を集めている。

「まちおかし」でまちおこし「アルザス」の同店で考え始めた。昨年春ごろ、店の客百人にアンケートを実施。その結果から、遠くから訪れた人でも購入しやすいよう日持ちするクッキーとマドレーヌのセットに決めた。クッキーは、白い粉糖をかけたさくさくした食感で、内海の千鳥ヶ浜の白砂に見立てた。マドレーヌにはレモン、イチジクなど町産の旬の果物を使用。パッケージなども工夫し、町を丸エリアに分け、タコやドルフィンタワーなどお薦めの観光スポットや名産品などの絵を配した。

48 (鈴木佐歩)